

訳者解説

1 はじめに

本書は Charles Wheelan, *Naked Money* 全訳だ。翻訳にあたっては、著者から送られた pdf ファイルを元にしつつ、ハードカバー版も参照している。

本書は、当然ながらお金についての本だ。著者はすでに『経済をまる裸にする』『統計をまる裸にする』の二冊を刊行している（いずれも今回と同じチームの訳で日本経済新聞社）。この本は、そのシリーズの最新作となる（題名の傾向がちがうのは出版社の都合なので悪しからず）。

こう書くと、不思議に思う人もいるかもしれない。多くの人は、経済学というのはお金の学問だと思っているので、「え、お金の話は当然ながら『経済をまる裸にする』でやってないの？」と

いう印象をもつかもしれない。でも、実はちよつとちがう。

2 経済学とお金

さつき述べたように、経済学というのはお金についての学問だと思っている人は多い。すべてをお金に換算してそのやりとりを論じるのが経済学、というわけだ。その結果として経済学者はろくでもない守銭奴と思われることも多い。

でも実は、経済学の中でお金は明示的には出てこない。特に最初のうちは、お金は中立の存在で、実体経済の取引での透明な価値伝達媒体としてしか扱われない。そして……それがまちがっているわけではない。お金はそういう透明な媒体でもある。

それでもお金が面倒なのは、お金というのが価値をためこむ手段にもなっているからだ。お金があると、すべてを物々交換に頼らなくていいので楽だ（といっても、これがお金の起源ではないことはあちこちで指摘されているので念のため。でも物々交換が面倒なのは事実だ）。でもその一方で、お金があることで、いろんな取引が途中でとまってしまう。魚からキャベツ、キャベツからお鍋、お鍋から散髪や人生相談という具合に、経済は次々に人がものやサービスを売ったり買ったりすることで成り立つ。たいがいのものは、そのまま喰ったり使ったりするし、そうでなければずつと抱え込んでおくのも面倒で場所ふさぎで腐ったりもするし、なるべくさっさと処分して自分が必要とする別のものを手に入れたほうがいい。

でもお金だけは——抱え込むのが楽で、場所も取らず、腐ったりもしない。すると、価値が取引の中でお金にずーっと貯まってしまいうこともあり得る。だから、お金があること自体が取引を起こりにくくしてしまう面がある。

世の中で、不景気が起こるのはそのせいだ。これは、史上最大の経済学者の一人、ジョン・メイナード・ケインズが20世紀初頭にきちんと示したことだった。かれの主著『雇用、利子、お金の一般理論』は、実体経済（つまり雇用）が、利子を通じて、お金の市場に左右されるんだよ、だからお金のことをきちんと考えないと、大恐慌後の失業はいつまでたっても解決されないよ、というのを述べた本だった。

でも、その後一部の経済学理論はそれを必死で否定する方向にも進み、不景気がお金とは関係なく起こるんだというのをしつこく証明しようとし続けている。経済学が専門だからといって、お金のことがわかるとは限らないのだ。

その一方で、経済学を勉強していない人も、お金について異様な考えを持っていることが多い。ピンク・フロイド、といってピンとくる人が本書の読者のうちの程度いるのかは知らないけれど、70年代に一世を風靡したプログレッシブロックの名バンドが「お金 (Money)」という歌を流し行かせた。お金こそは、今日のあらゆる邪悪の根源だ、という歌だ。お金は人の目を曇らせ、犯罪に走らせ、なにやら怪しげな仕組みを通じて善良な人々を貧しくし、悪人の懐を肥やし、格差を広げ、人々を分断し、心を失わせ云々。お金は人々を悪しきグローバル経済に組み込む陰謀であり、地域社会を分断し等々、といった話は、善意の社会改良主義者たちがしょっちゅう口走る

ことだ。それもあって、20世紀の社会主義国家の中にはお金の廃止を本当に検討していたところも多い。実際にそれをやらかしたのは、クメール・ルージュ政権下のカンボジアくらいだけれど、それを聞いて中国の毛沢東は「オレですら怖くてやれなかったことをよくやった！」と激賞したというし、またチェ・ゲバラはキューバ革命後に中央銀行総裁（!!）になったけれど、旧政府の役人を肅清する傍ら、お金の廃止を本気で考えていたという。

でも実際にはお金は邪悪ではない。とても有益で便利なものだ。そして、いまのお金が完全な信用だけで成り立っていることについて、ハラリ『サピエンス全史』はそれが妄想の産物だと述べるけれど、まさにそれこそが、いまのお金の強みでもあり弱みでもあるのだ。

3 — 本書の特徴

この本は、そういった話を、非常に標準的な形であれこれを説明しようとした本だ。お金について、その起源、金本位制など昔の仕組みから、インフレやデフレの説明、物価指数の計算などという地味なところから、中央銀行の果たす役割まで説明したうえで、かつての大恐慌から最近の、リーマンショックやユーロ圏の大問題、中国と米国の課題、さらにはビットコインやアベノミクスと、時事的な話題まで盛り込んで、お金の果たす役割を述べる。特に、いまの何も裏付けのない不換紙幣というものが、危うさも抱えつついかによいかについて強調してくれる。

どの部分をとっても、まったく目新しい話がかかれていないものではない。非常に堅実な入門書

になつてゐる。その意味で、この手の話に詳しい人は特に新しい発見はないかもしれない。さらに、中庸的な書き方をしているので、様々なことについて強い意見を持つ人は、逆に苛立つかもしれない。たとえば、ビットコインでお金のあり方が完全に変わり、中央銀行はもはや不要となり、しかもそれを通じて新しい世界が実現すると考えている人は、本書でのビットコインの説明を古くさい理解に基づく戯言だと断じるかもしれない。

が、まあそんなに詳しい人がこんな入門書を読むこともないだろう。そして、そうした人であっても本書の各種トリビアには「へえ〜」と思うこともあるんじゃないだろうか。ニューヨーク連邦銀行の地下金庫に、毎晩サンドイッチが置かれるなんていうネタは、ほくも本書で初めて知った。知つてどうなるわけではないけれど……まあだからこそトリビアだ。

そしてその書きぶりもとても平易だ。アメリカ色の強いオヤジギャグが並ぶのにいささか閉口する人もいるだろう。インフレファクターの映画の話とか、いささか悪のりめいた部分はあるが、それはご愛敬だ。過剰な比喻で話の本筋がわからなくなるようなことも、比較的少ない。本書を通じて、お金についていろいろ多面的な理解が得られるのは確実だし、そしてそれがとてもスタンダードな理解だということのも重要なことだ。

4 本書のその後…特にアベノミクスを中心に

さて、本書が出て少したつ。時事ネタの更新（ビットコインの話など）については、本書の訳注で少し補ったりしているけれど、大きな話についてここで少々触れておこう。

まずはユーロだ。ユーロは……相変わらず何も解決していない。もともと仕組み自体がかなり不安定なもので、それを政治的な意図でごり押ししたのがそもその問題というのは相変わらずで、それを本質的に変えるようなことは何も起きていない。ドイツと周縁国（ギリシャなど）との確執は続いていて、2017年にもギリシャは追加融資を受けつつも緊縮財政を強いられている。2016年のイギリスEU離脱の決定で、いまはユーロ問題から人々の目はそらされているけれど、いずれまた、どこかで大きな問題が起きてしまつたくおかしくないところ。

そして暗号通貨ビットコインは、その基本技術であるブロックチェーンが持つ可能性については取りざたされ、応用が検討されている一方で、お金としてはまだまだ、という感じではある。利用は増えているけれど、いまのところあくまでも支払い手段としてであつて、「お金」とは必ずしも言えない部分もある。それは本書の言う通りだ。そしてこれを書いている2017年7月時点で、利用者増加に伴う技術的な難点を解決するための仕様変更に伴うコミュニティ内の大きな亀裂や、最大の利用国だった中国政府による突然の全面禁止で、今後どうなるやらわからない状

況だ。

さらにドルについては、アメリカFRBはついに金利引き上げに転じ、さらに第10章で懸念されている、金融危機時に積み上げた資産の処分開始を発表した。いまのところ、まだ大きな市場の混乱は生じていないけれど、先行きははっきりしない。

そして……日本のアベノミクスの状況はどうだろうか？

まず、その話に入る前に本書におけるアベノミクスの基本的な描かれ方が非常に肯定的であることには注目してほしい。デフレは基本的によくもないものだ。デフレはありがたいなんていうのは、そもそも見当違い。デフレは何とかすべきだし（そもそもデフレに陥らないようにすべきだし）、そのために多少のインフレになってもかまわない。アベノミクスはまさにそれをやろうとしている。それが構造改革とか成長戦略とかいったものに代わるわけではないというのは本書の述べる通りながら、そうしたものを支援するためにも金融政策がとても重要なのだ、というのはまさに本書の指摘するとおりとなっている。

が、残念ながらアベノミクス——中でも日銀の量的質的緩和——は、いまだにデフレを克服して2パーセントのインフレに持つていくところまではきていない。これを書く直前に、日銀の黒田総裁は2パーセント実現の目標をさらに先送りにして2019年に行っている。これを見て、アベノミクスは失敗だ、効果があがっていないという論者もたくさん出ている。

でも一方で、雇用状況はそこそこ改善しつつある。失業者は減り、非正規雇用ばかりだという当初の批判をよそに、やがて正規雇用も増えてきて、ブラック企業は人集めに苦労するようになって

てきている。賃金も、少しずつ上がっている。こういうと「オレの給料は増えていない」とか「実感がない」といった話を持ち出す人が多いけれど、これは経済全体の話なので、あまりそういうミクロすぎる話をするのは適切とは言えないだろう。その意味で、金融緩和の効果は着実にあがっている。

じゃあ、なぜインフレにならないのか？ これについては諸説あるけれど、有力な説としては日本経済の潜在的な生産能力が思ったより高く、経済回復とともに、これまで働いていなかった人も働き始めた、というのが大きいようだ。世の中、物価の大半は賃金だ。だから賃金もつと大きく上がらないと明確なインフレにはならない。でも、労働者が増えるとその分だけ賃金の上がり方も遅くなって、インフレが起こりにくくなるようだ。

そしてもう一つ、いまの低金利の状態で経済を完全雇用にもっていくには、金融政策と財政出動の両方を一気にやる必要がある。1990年代は、財政出動が日本経済を下支えしたけれど、金融政策はバブルが怖いといって、デフレ退治にまったく取り組まなかった。だからその頃は、金融政策をもっと頑張ろうというのが大きな主張になった。でもその後、財政政策のほうは財政再建のかけ声と共に、ちょっと控えめになってしまった。財政赤字が大きい、国債発行しすぎというのがその議論だけれど、でも国債の利率はぜんぜん上がっていないので、実は発行しすぎとは言えない。そして、日銀の金融緩和で景気がちょっと上向いた瞬間に、財政政策のほうは消費税を8パーセントに引き上げて大ブレーキをかけてしまったという、痛恨のミスがあった。

すると、日本銀行はもう少し実際の日本経済の底力にあわせて金融政策で頑張る余地があるし、

それに伴い財政政策も、赤字を気にせず一気に大きなプロジェクト——教育充実でも子育て支援でも減税でも——をやる余地はあるはずだ。それができれば、本書の次の版ではアベノミクスについてもっと大絶賛になっているはずではある。

もちろん、それができるかどうかは大問題だ。日本銀行のほうは、デフレ克服に熱意をもった審議委員が次々に登場し、現在の政策が大きく変わることはしばらくなさそうだ。だから金融政策のほうはしばらく大丈夫かもしれない。その一方で財政政策のほうは、大きな無駄遣いとなつて、景気を刺激するかもしれないなかった東京オリンピックは、小池都知事のピント外れな独断による無意味な市場移転延期により、実現すら危うい状態になっているし、それ以上に消費税率を10パーセントに上げようという愚策も、これまでは延期され続けてはきたものの、どうなるかわからない。そして何より、政権与党の中に安倍首相の経済政策を引き継ごうという政治家がほとんど見当たらず、財政再建ばかりを掲げたがる人しかいないのが、大きなリスクとなっている。ホント、なぜこれほど世間的な人気の高いアベノミクスをそのまま受け継ごうという政治家が出ないのかはまったくの謎だ。財政再建を掲げて消費税率を上げたら、景気崩壊で政治生命を絶たれるに決まっているのに……

が、お金の話からはちよつとずれてしまった。どんな結果になるにせよ、本書の現在の書き方からもわかるとおり、アベノミクスの金融緩和の部分に関してはすでに一定の評価が定まっている。本書の立場がどれについてもきわめて標準的なものだ、というのは繰り返しておこう。いまだにアベノミクスについて、異常な政策だとか効果がないとか言う人がいるけれど、本書を認め

ば、決してそんなことはなく、むしろこんな入門書ですら取り上げるほどのごく標準的な政策なのだ、ということにはわかるはずだ。

5 著者について、および謝辞

著者チャールズ・ウィーランは、いまや数多く見かける経済学入門書の草分け的存在である『経済学をまる裸にする』の著者として名高い。そのときも各種問い合わせにはすぐ答えてくれたし、本書でも休暇中にもかかわらず、つまらない質問にもすぐに回答をくれて大変に助かった。ありがとう。

翻訳にあたっては、前半を守岡、後半を山形が処理した上で、山形が全体を通して見直して訳文を統一している。原文からして軽快で読みやすい文章で、大きく悩むような部分はなかった。訳上の大きなまちがいはないと思うが、もし何かお気づきの点があれば、訳者まで是非ご一報を。サポートページ <http://cruel.org/books/nakedmoney/> で、訂正などは随時公開するので。

また、本書を任せてくれたうえ、原著にはない図や小見出しをつけて、日本語版をとても充実したものにしてくれた、東洋館出版社の大竹裕章氏にも感謝する。ありがとう。

2017年8月 東京にて

訳者代表 山形浩生 (hiyori13@alum.mit.edu)